



藤縄善朗市長



岸田留佳さん

(テコンドー強化指定選手・鶴ヶ島清風高等学校2年生)



佐藤真太郎さん

(ボブスレーソチ五輪代表・現大東文化大学教員)



鶴ヶ島から世界へ

市の魅力発信のチャンス

鶴ヶ島市×東京オリンピック

岸田さんが活躍されているテコンドーなら、駅の近くに道場などの交流拠点があれば、鶴ヶ島としての特徴を出せると思います。

3年後の2020年は、東京オリンピックと『脚折雨乞』が開催される年です。藤縄市長とオリンピックに関係する2人に、3年後に向けた意気込みと夢を語ってもらいました。

市長

2020年の東京オリンピックの時には、鶴ヶ島市を代表する伝統行事『脚折雨乞』も開催されます。鶴ヶ島の魅力を積極的に国内外に発信し、世界にアピールできる大きなチャンスです。

川越市内の霞ヶ関カントリー倶楽部がゴルフ競技の会場になりますので、選手だけでなく、応援や観戦で多くの人が鶴ヶ島にも訪れると思っています。

佐藤 スポーツの魅力発信というところで考えると、市は色々な種目を支援するのではなく、種目を絞った応援をするのも面白いのではないのでしょうか。

「武道・伝統・雨乞い」のようなイメージができて、見に行ってみよう、あるいは、そこで合宿をしようなど、PRにつながるかもしれません。

「鶴ヶ島、ここにあり」

市長 確かにそうですね。昨年8月の『脚折雨乞』では、初めて海外メディアに取り上げられました。アメリカのABCニュース、中国の新聞、日本の情報を7か国語で発信するニッポンドットコムというサイトでも紹介されました。「鶴ヶ島ここにあり」というものを発信していきたいですね。

佐藤 実際に鳥取県がジャマイカの合宿地となった時、鳥取では日本とジャマイカの応援に大いに盛り上がりました。テコンドーなら韓国と交流が生まれ、市民の方々は日本だけでなく、韓国チームも応援する雰囲気が出来上がり、友好関係が深まるとともに、それが世界へのPRにもつながります。

オリンピックには、国を超えた人々をつなげる力があります。



ソチ五輪の経験者から 未来のオリンピックへ

地元の応援が力になる

市長 佐藤さんはソチオリンピックにボブスレーの選手として出場されました。市でも市民活動推進センターでパブリックビューイングを行いました。大勢の人が応援に駆けつけ超満員でした。地元の声援は届いてましたか。

佐藤 実は、全然知らなくて後から聞きました。気づいたら鶴ヶ島の友人たちがたくさん連絡をくれていました。地元に応援は選手にとってはとても力になるものです。嬉しかったです。

市長 ボブスレーはどのくらいのスピードが出るのですか。

佐藤 最大150kmです。F1のレーシングカーに乗っているような感覚で、体感速度は300km以上です。コーナーでは、大人2人が上からのしかかっているようなものすごい圧力を受けます。スピードとパワーと精神的なタフさが求められるスポーツですね。

オリンピックへの道は別格

佐藤 私くらいの才能の人は日本中にたくさんいます。その中で私がオリンピックに出られたのは、諦めずに競技を続けていたからだと思います。それだけは間違いありません。

市長 努力を続けるというのも才能ですね。

佐藤 そうです。「心が育っていない」

選手は絶対に強くなれません。少しでも挫折すると辞めてしまいます。私は現在、大学で陸上を教えています。私はオリンピックで通用する選手は、信念をしっかりと持ち、人としての根幹やアイデンティティがしっかりしています。

自分の近い将来、次の瞬間こうなるというのが映像として見えている選手は強い。「未来視」できる力も重要です。人から「こうすればこうなる」と言われたことを信じるのではなく、自分でどうなるかを予想し、結果をもとに修正する、この過程を繰り返すことが大切です。

オリンピックの最終選考で勝つためには、ライバルを混乱させることもひとつです。普段は100%の力を出さず、ここぞという場面で10割の力で挑みます。それまではいつでもその力を出せる状態にはしておきますが、決して見せません。常に9割の力で調整をしておけば体の故障も少なくいつでも全力が出せます。私もそうして、最終選考を勝ち残りました。そういう駆け引きも必要だと思います。

市長 それには真の実力が必要ですね。佐藤さんの話は、岸田さんのテコンドーにも通じるところがありそうです。

リオ五輪 落選の悔しさをバネに

岸田 まさにリオデジャネイロオリンピックの最終予選がそうでした。2次選考までは対戦する機会の多い選手たちであ



パブリックビューイングでは、「佐藤！佐藤！」の大合唱

ったことから、自信をもって臨むことができました。最終選考では、世界で活躍する選手が相手でしたので、挑戦者の気持ちで挑みました。同じ相手と3回試合をしたのですが、私はどの試合も100%の全力で挑みました。1試合目は勝ちましたが、その後は相手に自分の技を見抜かれ、結果的に大差で負けてしまいました。

残念でしたが、今の佐藤さんのお話を聞いて、自分に当てはまることも多かったので、これから活かしていきたいと思っています。



2014年ソチ五輪男子ボブスレー4人乗り競技に出場した鶴ヶ島出身の佐藤さん(写真一番手前側)。陸上選手の脚力を活かしてボブスレーでも活躍しました。

伝統行事もスポーツも同じ感動

市長 『脚折雨乞』をご覧になったことはありませんか。

佐藤 はい。自分の地元で雨乞いのような伝統行事が残っていることは誇りに思います。エネルギーに溢れていて、それが伝わってきます。

伝統行事もスポーツも人間の持っているエネルギーの表現という意味では同じです。それが人を感動させるのだと思います。

岸田 私は、実際に直接見たことはありませんが、小学校の時の調べ学習で紙芝居にしたり、テレビで見えています。みんな一丸となっていて迫力があり、

圧倒されますね。

市長 人のエネルギーが凝縮され、心一つにして皆が向かっていくことが感動を呼ぶんでしょうね。

佐藤 伝統行事もスポーツも芸術性があり、1回しか表現できないもので再現性は絶対がありません。その時にしか出せない、そういう価値があります。

雨乞いも過去何回も行われていると思いますが、昨年行われた雨乞いは二度と同じものは出来ない貴重なものです。

市長 参考になります。オリンピックに合わせてPRしていきます。

東京2020 “感動を世界へ”

佐藤真太郎 × 東京2020

市長 佐藤さん、指導者として3年後の抱負を聞かせてください。

佐藤 東京でオリンピックが開かれるということは、競技者にとっても刺激を与えています。まだまだ才能のある選手が沢山出てきて、競技人口も増えるはず。私にできることは、まずは目の前のことをひとつひとつやっていくことだと思えます。今、自分が関わっている選手のサポ

ートをしっかりと行い、きっかけやヒントを与えていきたい。「仕事をちゃんとします」ってことです。

市長 ヒントを与える際に指導者としてのコツがありますか。

佐藤 自分で気づいたという喜びが大事です。自分のやり方で強くなった、という感覚を持ってほしい。選手には個人のオリジナリティを大切にしたいので、教え込むというよりは気づいてもらうということを意識しています。

岸田留佳 × 東京2020

市長 岸田さんは、選手として3年後の抱負やこうしていきたいという目標はありますか。

岸田 東京オリンピックに出場し、金メダルを取りたいです。でも、まだ国際大会では1度しかメダルを取れていません。国際大会で表彰台に上がる人はいつも決まっています。まずは、その人達と並んで戦える選手になる、そしてオリ



西市民センターで練習をする岸田さん(写真左側)。2016年の第9回全日本テコンドー選手権大会ジュニアの部優勝、シニアの部でも初出場で初優勝。最優秀選手賞も受賞しました。



ピックでは金メダルを取る。そのためには多少の無理をすることも必要だと考えています。一日を大事にしていきたい。国際大会、オープン大会で確実にメダルを取れるようになり、そしてオリンピック予選では圧倒的な強さで余裕をもって代表に選んでもらいたいです。

市長 岸田さんがそもそもテコンドーを始めたきっかけは何ですか。

岸田 兄がテコンドーをしていたので、たまに見に行っていました。最初は全然やるつもりはなくて。でも、ある日、可愛い理由なんです。子ども用のシャランパンを買ってほしくて、そして母に「テコンドーを始めるなら買ってあげるよ」と言われて、それで始めました。

今は、都内と西市民センターの両方に通って練習をしています。都内ではとてもハードな練習をこなしていますが、西市民センターでは小学生たちも交えて楽しみながらやっています。小さい子たちの一生懸命な姿がまた刺激になり、メリハリのある練習ができています。

市長 最初から強かったのですか。

岸田 最初は全然勝てませんでした。特に1回も勝てない子がいて、その子に勝つために頑張っていました。その子の名前を書いた紙を部屋に貼って、挫けそうになった時はそれを見て頑張りました。今は違う階級なのですが、2人そろって全日本で優勝するなど、お互いに切磋琢磨しながら頑張っています。

市長 岸田さんは伸び盛りなので体力

や精神、色々な面で日々成長している。2020年まで長いのか短いかわからないですが、鶴ヶ島市民7万人、いや日本国民1億2千万人が応援しています。ぜひ、夢をかなえてください。

岸田 地元のためにも頑張ります。

市長 テコンドーの練習と学校の両立で大変忙しい日々を過ごしていると思いますが、体調は大丈夫ですか。

岸田 練習は厳しいですが、とても充実した日々を過ごしています。

最近、練習帰りの途中でテコンドーのヘッドギアをうっかり落としてしまったことがあります。

色々と探しましたが見つからず、半ば諦めつつ、近くの交番に確認をしたら届けられていたのです。

届けていただいた方に連絡し、お礼をお伝えしたところ、逆に私への応援の言葉をいただいたり、鶴ヶ島の方の温かさを感じました。とても嬉しかったです。

市長 東京オリンピックでは、鶴ヶ島から世界へ感動を発信していきたいですね。佐藤さん、指導者として、選手たちを導いていってください。岸田さん、選手としてオリンピックで活躍してください。私も鶴ヶ島市民のために頑張ります。



今号では、3人に東京オリンピックへの夢と希望を語ってもらいました。東京2020に向けてお二人のますますのご活躍と、まだ見ぬ未来のオリンピックたちを「広報つるがしま」は応援していきます。

「脚折雨乞」の詳細は市ホームページで

脚折雨乞

検索



つるが島市「スポーツ大好き!!」
応援エンブレム
© 鶴ヶ島市